

～新たな挑戦に向けて

- 2 ポスト京都議定書
- 3 国内環境政策
- 4 温室効果ガス排出削減対策
- 5 生物多様性
- 6 自治体の先進事例 / 大学の研究室から
- 7 土壌・地下水環境
- 8 都市資源開発
- 9 リサイクルの現実
- 10 環境配慮設計・環境配慮工場
- 11 スーパークールビズ
- 12 省エネルギー・節電
- 13 省エネルギー・節電
- 14 燃料電池
- 15 エコカー
- 16 再生可能エネルギー / 風力
- 17 再生可能エネルギー / 太陽
- 18 再生可能エネルギー / バイオマス・地熱・小水力
- 19 スマートグリッド / 国内先進事例
- 20 スマートグリッド / 国際展開

地球環境



①青森県に立地する風力発電施設②夏の軽装を奨励する環境省の国民運動は例年よりも一歩踏み込み「スーパークールビズ」に衣替え



2011年は地球環境を巡る取り組みで転換の年となるかもしれない。

日本は11年3月11日に発生した東日本大震災で甚大な被害を受けた。これを機にエネルギー政策の見直し議論が熱を帯びる。今夏は電力需給のバランスの悪化が予想され、省エネルギー・節電が大命題となっている。再生可能エネルギーはエネルギー政策の新しい柱の一つとして、技術革新と普及がさらに進むことが期待されている。

その一方で今年11月末に南アフリカで開かれる国連

気候変動枠組み条約第17回締約国会議(COP17)で焦点となる13年以降の国際枠組みの事前交渉は、停滞

ぎみ。国内の温室効果ガス25%排出削減目標も東日本大震災の発生で揺らいでいる。
10年10月に名古屋市で開かれた生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)で最大の成果とも言える「名古屋議定書」の採択。日本政府は今年5月に同議定書に署名した。11年は国連が定める国際森林年。森林を適切に保全し、持続可能な形で利用しているか。企業レベル、個人レベルも対応が問われている。

問題

科学は世界経済に
何ができるか。

大統領も認めている。マネーゲームは終わった。

環境分野への投資が、次の世界を動かしてゆく。

電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池。それは、旭化成が発明した環境技術です。

グリーン・ニューディールという新語に象徴されるように、今、環境のための技術が、経済成長の役割も担おうとしている。はたして、その期待に応えられる技術が、世界にどれだけあるだろう。

電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池。これは、1985年、旭化成の吉野彰が発明した。多くの科学者があきらめてきた新たな二次電池(充電可能な電池)の開発。

そこでは、正極、負極に用いる素材の問題が極めて大きい。吉野の発明は、様々な素材技術を持つ旭化成ならではの成果といえるかもしれない。

(現在、リチウムイオン電池内のセパレータは世界シェア1位である)蓄電量が大きい。軽量である。有害物質を含まないなど、優れた性能を持つこの電池の誕生で、パソコンなどのモバイル化が一気に進んだ。そして今、電気自動車が走り始めている。人々の期待をのせて。

旭化成は考える。長年培ってきた環境技術で、もっと世界と競い合おう。それが、この国の次の成長につながる。そして、世界の経済を活性化してゆく。

昨日まで世界になかったもの「リチウムイオン電池」。詳しくは www.asahi-kasei.co.jp

昨日まで世界になかったものを。

AsahiKASEI